

今年の終りの陽の光 ―宮沢賢治「風の又三郎」論―

小 埜 裕 二*

(平成二十二年九月三十日受付)
(平成二十二年十一月四日受理)

要 旨

「風の又三郎」は、村への転入者である高田三郎父子が体现する〈近代〉への反発の物語という方向で近年、研究が進められてきた。本稿では〈村の文化〉〈子供〉をキーワードに本作を読み解き、「風の又三郎」が〈子供〉が〈大人〉になりゆくその境において、異質世界との接触を通じて、再び、よりプリミティブな〈子供〉の世界へ戻っていく物語であることを明らかにした。テキスト中の言葉をかりれば、「今年の終りの陽の光」の輝きを〈子供〉に与える物語といえよう。〈村の文化〉は異質な世界、未知の世界を豊かにもっている。それに触れることで高田三郎は〈子供〉の世界を生きた。一郎や嘉助もまた、高田三郎＝風の又三郎という異質な存在に触れ、その存在を信じることで〈子供〉の世界を生きた。そうして輝く〈子供〉の世界は、本作が書かれた時代状況に照らしてみると、凶作や農村不況の現実世界に対するアンチテーゼとして書かれたことが理解される。

KEY WORDS

子供 child 村の文化 culture of a village 異質世界 heterogeneous world

一、問題の所在

宮沢賢治の童話「風の又三郎」は、初期形「風野又三郎」を全面的に改変し、さらに童話「種山ヶ原」「さいかち淵」等を改作し、それらを組み入れて成立した。「児童文学」二号に発表予定だったが、雑誌が刊行されなかったことで生前未発表となった。最終形の成立時期は確定的ではないが、昭和六年から八年の間と推測される。

「風の又三郎」に関して、作品内に登場する村童達にとって「又三郎」は同じ文化の共同性の上に現れる、「リアル」な幻想¹⁾で、いわば「ありふれた」存在にすぎないが、高田三郎という存在は又三郎幻想のなかに納まりきらないところがあると島村輝はいう。そう読ませるテキストの根拠は、「九月八日」に高田三郎が川の中で聞く不気味な声にある。高田三郎には、村から追いやられなければならない何かがあるというわけだ。実際、「風の又三郎」を

すると誰ともなく、

「雨はざつこざつこ雨三郎

風はどつこどつこ又三郎」と叫んだものが「あ」りました。みんなもすぐ声をそろへて叫びました。

「雨はざつこざつこ雨三郎」

風「はどつこどつこ又三郎」

すると又三郎はまるであわてて、何かに足をひっぱられるやうに淵からとびあ「が」って一目散にみんなのところを走ってきたがたがたふるえながら「いま叫んだのはおまへらだちかい。」とききました。

「そでない、そでない。」みんなは一しよに叫びました。ペ吉がまた一人出て来て、「そでない。」と云ひました。

* 人文・社会教育学系

「風の又三郎」の「九月八日」のさいかち淵から聞こえてきた不気味な声は、確かにこの作品の重要箇所であろう。岡本文子が述べるように、それまで「疑われる存在」であった高田三郎が「疑う存在」へと変わる「反転」に作品の意義が見いだされるからだ。この場面に關して、佐藤泰正³は、賢治が「幼稚」の無垢性を逆手にとって、他界の深淵をかいま見たものの、あるいはその暗黒の叫びを聴いたものの無垢なるおびえをあざやかに描きとつてみせた」と述べた。また萩原昌好は、こうした恐怖は「子どもだけに体感できるもの」と述べている。

しかし、ではなぜ高田三郎が「疑う存在」へと変わり、その後、転校しなければならなかったのか。前掲岡本文子は、高田三郎がその不気味な声を聞いたのは、彼のもつ「近代」の要素が土地の霊の反感を買い、追い払われようとしたからだという。高田三郎の身なりや言動、「モリブデン」の採掘にやつてきた父の目的等から、「町の文化」と「村の文化」の衝突をその場面に見る秋枝美保⁵の読み方も同様である。しかし高田三郎父子の側に、ある過剰なものを読みとる捉え方もできようが、「村の文化」に「町の文化」にないものがあつて、それを持たないがゆえに高田三郎が川からの声を不気味な声として受けとつたという解釈もできよう。「風の又三郎」には中村三春が「空間の謎」と名づけた川の中の不気味な声を、何の不思議もなく受けとる村童達とその声に怯える高田三郎の対比がある。「村の文化」の側にある村童達には既知の声であるものが、高田三郎には未知の声となり恐怖をひきおこした。

本稿では、「村の文化」の特質に注目する方向で「風の又三郎」を読み解いてみたい。さらに「村の文化」への注目と同時に、ものごとを捉える「子供」の理解のありように着目する。「子供」にとって未知のものは恐れの対象になる。「子供」が異質な世界、未知の世界に触れたとき、その世界を追い払うのでなければ、のみこまれてしまうこともある。何かのりうつつたかのようにその世界を生きる。それは「大人」の知恵からすると「子供」の無知な態度と映るが、その世界を生きる「子供」の側からすると、その状態は、より「子供」の真実を生きた状態といえる。「子供」はいずれ「大人」になっていく。「修羅」の世界に自己が存在していることにも気づいていく。それが賢治テクストの定法であるが、「風の又三郎」というテクストは、「子供」が「大人」になっていくその境において、「子供」の世界へ、より深く入っていく物語である。テクスト中の言葉をかりれば、「今年を終りの陽の光」の輝きを「子供」に与える物語といえる。「村の文化」に触れることで高田三郎が「子供」の世界を生きる。そして一郎や嘉助もまた、高田三郎＝風の又三郎という異質な存

在、未知の存在に触れ、その存在を信じることで「子供」の世界を生きるのである。

川から聞こえてきた不気味な声の場面をもう一度ふり返つてみよう。右の引用をよむと理解されるのは、繰り返しの表現が用いられていることである。何ものかの最初の声を村童達は違和感なく受け入れている。その声を聞きうける素地が「村の文化」の側にある村童達にはあつた。しかし注目したいのは、その声を聞いたあとと村童達の反応である。最初の声に対して「みんな」は同じ言葉を「すぐ声をそろへて叫」んでいる。「雨はざつこざつこ雨三郎」「風はどつこどつこ又三郎」が繰り返され、高田三郎が「いま叫んだのはおまへらだちかい」と訊いたとき、「そでない、そでない」と「みんな」が叫び、そのあとで「そでない」とまた「ベ吉」が述べる。同じ言葉を復誦することにはどのような意味があるのか。そうすることで怯えの芽を村童達は外側に押し出そうとしたのか。こうした反復反応は、「子供」に備わつた特性といえよう。子供が夢と現実を混同するように、異質な世界に同化・同調する一種のトランス状態と考へてよい。この行為は、村童達だけでなく、高田三郎も行っている。

「九月八日」のさいかち淵で高田三郎が不気味な声を聞いたあとに続く「九月十二日」の冒頭は次のような一節で始まる。

「どつどど どどうど どどうど どどう
青いくるみも、吹きとばせ
すつぱいくわりんも吹きとばせ
どつどど どどうど どどうど どどう
どつどど どどうど どどうど どどう
どつどど どどうど どどうど どどう」

先頃又三郎から聞いたばかりのあの歌を一郎は夢の中で又きいたのです。

このくだりを読むかぎり、高田三郎は一郎にどこかで「風の歌」をうたつて聞かせている。この「先頃」は初期形「風野又三郎」の草稿を引き継いだ箇所であるが、後説法をもちいて一郎の夢とのかかりでひそかに語られるこの一節を、最終形「風の又三郎」にあつても賢治はそのまま生かそうとしたと考える余地はないか。残された原稿の当該箇所には他の草稿同様、多くの手入れがなされているが、その折りにこの箇所を消す機会は十分あつた⁷。

これまでの解釈では、この箇所は、佐藤通雅がいうように「不自然この上もない」。箇所となる。「賢治はむしろ三郎が「又三郎」のふるまいをすることを

細心の注意を払って避け続けてきた」のに、ここでは高田三郎が風の又三郎になつてゐるからである。だが、この箇所は「不自然この上もない」箇所どころか現行テキストにあつて解釈上の要となる箇所だと思われる。《風の歌》は、川の中で聞いた不気味な声を通して、高田三郎が風の又三郎になつたことをあらわす象徴的な歌として解釈できるからである。

以下の節では、《村の文化》に触れた高田三郎が村童達の仲間に入ったことを明らかにし、《風の歌》をうたう経緯を述べるとともに、村童達の仲間に入った高田三郎がなぜ村を去ることになるのか、それによつて生じるテキストの意味や効果について考察する。最後に、本作の主題を際立たせるために用いられた手法を明らかにし、テキストをとりまく時代状況について考えてみたい。

二、異質世界の媒介者

小さな村童達が高田三郎の登場を怖がつたように、また嘉助が山で遭難しかけたさいにしきりに怖がつたように、「鼻の尖つた人」が村童達の呼びかけに慌てたように、高田三郎もまた川からの不気味な声に怯える。他の村童達も高田三郎も《子供》であり、《子供》を取りかこむ恐れの世界は共通してある。村童達にとつて最初の異質な存在は高田三郎であつた。その高田三郎が異質なものに怯えることで物語は最終局面をむかえる。異質なものととの接触の物語が「風の又三郎」である。

自分達を脅かす異質世界（《子供》にとつて自分達を脅かすこと／ものが存在する世界を「異質世界」と広く定義しておく）から身を守るために《子供》は、異質世界を拒絶したり、仲間を引き入れたたり、種々の方法を講じる。

だが、反対に子供が異質な世界に同化・同調することもある。不気味な声を聞いたものは、今度はその声に魅入られたように声を伝えるものとなる。「風の又三郎」を、異質世界を媒介する《子供》の物語として捉える視点はこれまでの研究にはない。異質な声を聞いた後で、異質世界を信じ、その世界を生きる存在がこのテキストの《子供》である。この声の媒介者にならない者が《大人》である。「九月七日」に登場する「鼻の尖つた人」と高田三郎の違いはそこにある。

村童達が声をそろえて叫んだ「雨はぎつこぎつこ雨三郎」「風はどつこどつこ又三郎」という声も、その声が村童達の計略によるものでないとすれば、村童達が異質世界に触れ、それに魅入られるように声を和したものであろう。ひ

るがえつて考えれば、生簀の魚を覗く「鼻の尖つた人」に発する村童達の声も「あんまり川を濁すなよ、いつでも先生云ふでないか。」と同じ言葉が何度も繰り返される。この繰り返しにも異質世界に触れた《子供》の反復作用が読みとれる。テキスト冒頭で嘉助が「ちやうはあかぐり ちやうはあかぐり」と意味不明の言葉をくりかえしながら登場するのは、同じ異質世界を生き、それを繰り返す《子供》の世界を象徴的に表したものと見えよう。

「九月八日」の場面で村童達がさいかち淵で遊ぶ「鬼っこ」の《鬼》とは、異質世界の象徴（的存在）であり、それに触れられたものは《鬼》となる。「根っこ」にいるかぎり、《鬼》につかまることがないが、それでも《鬼》はすべりやすい「根っこ」に水をかけ、次々に村童達をつかまえる。村童達にとつて《家》や《学校》から離れた自然は、異質世界と触れ合う可能性の高い場であり、そこが《家》や《学校》などに等しい「根っこ」であつても、天候の急変などで異質世界が現れ、村童達は異質世界を生きる者となる。

高田三郎は川の中で不気味な声を聞いたとき、子供らしい怯えを見せるが、同時にその声は高田三郎を別の存在に変身させた。高田三郎は、そのとき、いわば風の又三郎になつたのである。だからこそ後に、高田三郎は一郎に《風の歌》を教える存在となるのである。一郎の夢のくだりで語られるその場面こそ、高田三郎が、一度きり、風の又三郎になつた瞬間である。それをこのテキストはあからさまに語ることなく、そつと暗示的に表した。

テキスト冒頭で転校生の高田三郎が村童達に与えた異質さは、村童達になじみのある風の又三郎のイメージのなかで理解され、あらたな関心と恐れを感情を引き起こすが、今度は高田三郎自身が別の異質世界に触れることで、その世界を生きる者となる。高田三郎は、他の村童達が高田三郎を風の又三郎と信じたとように、異質世界を受け入れ、その世界を生きたのである。その相同性に着目するなら、高田三郎は彼の特殊な属性ゆえに村から追放されたのではなく、怯えの感情を抱き《風の歌》を歌うことで、異質な世界に取りかこまれた《子供》世界の一員として、村童達の仲間に入ったのである。かりに不気味な声に少しも動じない鉄の心をもつた少年が高田三郎であつたなら、そのときこそ彼は村から追われていたであろう。

異質世界は、村童達の空間の内外にある。外側にある異質世界は、都会と田舎の落差が与えるものである。内側にある異質世界は、自然そのものであり、また前近代社会の古い記憶にもとづくものである。村童達も高田三郎も、互いに異なる二つの異質世界に触れることで親しくなつていった。

だが村童達と高田三郎が、《村の文化》の側にある風の又三郎というイメー

ジを仲立ちに結びついたことは注目すべきであろう。〈村の文化〉が、村童達の外側に位置する転校生の異質さや内側に潜む川からの声を受けとめる下地となり、また高田三郎が〈風の歌〉をうたい村童達の仲間に入っていく枠組みを用意した。その意味で〈村の文化〉の方がより豊かに異質世界と関わる力をもっていた。

三、今年の終りの陽の光

「風の又三郎」の結末では、嘉助と一郎の間で高田三郎の正体が何であるのかをめぐって、探りあいが行われる。一人の胸のうちでは、高田三郎は風の又三郎であった。しかし嘉助と一郎はそれを口に出して認め合うことができない。もともと年少の子供ならそれを無邪気に言葉にすることもできたろう。彼等はそれを信じることのできる世界に生きていた。しかし一郎と嘉助は、心のかで風の又三郎の存在を信じていても、言葉にすることはできなかった。言葉にすると、異質世界に触れて得たもの（風の又三郎が存在するという実感）は崩れ去る。

結末で自分達の世界から高田三郎がいなくなったとき、少なくとも一郎は祭りが終わったような、がらんとした、さみしい思いを抱いただろう。大人に成りゆく一郎の前には、もう〈子供〉の王国は出現しない。だが、嘉助との間で高田三郎の正体に関する言葉を口にできなかったことで、一郎の胸のうちに、そつと〈子供〉の世界は守りおさめられた。

高田三郎は、先述した一カ所を除いて、高田三郎でしかない。もとより初期形「風野又三郎」で示された風の精としての属性はもっていない。しかし一郎や嘉助の胸のうちにある〈子供〉の世界の中では、風の又三郎は現実の高田三郎以上に存在感がある。「九月四日」の嘉助の「夢」の中にも、また「九月十二日」の一郎の「夢」の中にも風の又三郎は登場した。嘉助の「夢」や一郎の「夢」に又三郎があらわれたことで、異質世界が現実世界を凌駕した。一郎の「夢」に風の又三郎が現れるためには、異質世界に触れ〈風の歌〉を歌う高田三郎の変身が必要であった。高田三郎も川のなかで不気味な声を聞き、それがいわば夢の働きをもち、異質世界が現実世界を凌駕したのである。かくして高田三郎のなかにも風の又三郎は息づき、嘉助や一郎の胸にも風の又三郎は息づいた。

賢治の「やまなし」に登場する蟹の父と兄弟には、〈修羅〉の世界に対する認識の違いがあった。やがて兄は〈子供〉の世界を卒業し、〈大人〉の世界へ

入っていく。目覚めているものと気づかないものの相違は、〈大人〉と〈子供〉の差異としてまず表され、次には子供のなかの兄弟の差異として表された。「山男の四月」や「紫紺染について」では人間と山男を対比させ、「鳥の北斗七星」では大尉と許嫁の対比を通じて、その差異を描いた。この表現に賢治は巧みであった。

本作の場合は、町の子供と村の子供の差異から出発するが、差異はテキスト中の日々の出来事（異質世界との接触）を通じて解消され、「みんな」の胸に〈子供〉にしか捉えられない真実が宿る。しかし、異質世界への同化が永続するものでないことを知るかのように、高田三郎の突然の転校によって夢の世界はかき消され、夏のおわりの最後の輝きのように夢の世界が結晶化する。「やまなし」の蟹の兄弟の時間がいわば〈子供〉の時代の最後の輝きを放っていたように、一郎や嘉助も夏の輝きをガラスのマンツのように身にまとう。〈子供〉から〈大人〉へ向かう変化の境に見られる輝きと充溢については、嘉助が山で遭難し命を助けられたあとの、夏から秋へ向かう次の自然描写に象徴的に示されている。

霧がふつと切れました。陽の光がさつと流れて入りました。その太陽は、少し西の方に寄ってか、り、幾片かの蠟のやうな霧が、逃げおくれけ仕方なしに光りました。

草からは雪がさらさら落ち、総ての葉も茎も花も、今年の終りの陽の光を吸ってゐます。

「鹿踊りのはじまり」の嘉十が鹿をまねて太陽を拝んだと同じように、高田三郎も風の又三郎が存在する異質世界に触れ、その世界を生きた。物語の展開からいえば、そうした異質世界に接触し、その世界を信じたのは、まずは嘉助であり、次に三郎であり、一郎である。嘉助が〈子供〉の世界に入り、次に高田三郎が〈子供〉の世界に入り、そして一郎が〈子供〉の世界に入った。こうして一連のサイクルが完了したところで、高田三郎＝風の又三郎は村童達の前から姿を消す。高田三郎親子の転出は、その意味でテキストの要請であったが、しかし、その要請は彼らの夏を輝かせるためばかりでなく、賢治が時代の状況をたくみに取り入れた結果でもあった。そのことについては、次節でふれる。

現実世界とは異なる世界を信じることは、大人からすると必ずしも幸せなことではない。現実世界を見据えて生きることを幸福と考えるからだ。しかし病

を得た晩年の中島敦の「幸福」（『南島譚』昭和一七年）がそうであったように、『風の又三郎』の幸福は大人の考える幸福の範疇にはない。〈子供〉は自然の中にある大いなるものに感心し、その異質世界を生きているのである。

ところで高田三郎が歌った『風の歌』は、何を吹き飛ばせと歌っていたのだろうか。「青いくるみ」や「すっぱいくわりん」が表すある未熟なものイメージは、異質世界に触れて同化しようとする〈子供〉の意識を指していたのだろうか。だが、吹き飛ばされる「すっぱいくわりん」は、〈子供〉が信じた異質世界を成長とともに疑う自らの〈大人〉の意識の芽それ自体であったとも解釈できよう。そうした意識が吹き払われ、〈子供〉の世界は輝く。風は、村童達がいだく「がらんとした気持ち」をも吹き飛ばし、彼らの夏を輝かせる。

「鼻の尖った人」が最後まで自分の問いに答えが返されず、おすおすと退場したあと、声をそろえてその人を追いやった村童達は「がらんとした気持ち」を抱いて家へ帰っていくが、高田三郎が川の中の声に怯えた場面の間も、声をそろえて叫んだ村童達は同じ思いで「家」へ帰っていっただろう。もてあますしかないそうした村童達の「がらんとした気持ち」は、それぞれの「家」でその都度、癒される。〈村の文化〉の中にある村童達の「家」は、「風の又三郎」の改稿時期と同じ頃に書かれた三好達治の詩「雪」（『測量船』昭和五年）のように、彼らを眠らせ、〈子供〉の時間を安らかに積もらせていく。

四、秋の風

学校に通う高田三郎や村童達は、いずれも近代国家のなかで有用な人間になるための教育過程にあるが、その過程の優秀者として高田三郎は長じていても、村の内部に潜む異質世界は未知のものであった。このテキストは、村の外側にひろがる異質世界というよりも、村童達が過ごしてきた何でもない村の暮らしの内側にある異質世界に目をむけさせる。大人よりも子供、都会よりも村、近代よりも前近代に価値を置いたテキストが「風の又三郎」である。

賢治は語りの焦点を高田三郎におくことはしなかった。賢治はむしろ村童達の日を通して高田三郎をみた。高田三郎が風の又三郎なのかそうでないのかそういう疑問のなかで、テキストは進行する。高田三郎を風の又三郎にしたのは村童達の目であって、高田三郎自身は川の声におびえる〈子供〉の一人にすぎない。学校教育は、異質な世界を合理的に理解させるが、焦点化された村童達はそうした教育とは別次元の目で、高田三郎を見る。その見方こそ〈子供〉の見方であろう。異質なものとの接触をとおして、高田三郎自身も風の又三郎と

なる瞬間が訪れる。結末では〈大人〉の仲間入りをしようとしていた一郎にもそれが訪れる。近代の小説や童話が「ひとり」の主人公をとりたてたのに対して、「風の又三郎」では「みんな」が次々に「鬼っこ」の〈鬼〉となる。

子供の読者は、この物語から、ある恐怖を読み取る。その恐れは感情こそが〈子供〉の強みである。だが〈大人〉の読者はどうであろう。そこにある恐れはもうなじみのなくなつたものである。近代的知は、とりわけ大人の分別知は、〈子供〉がもつ畏怖の感情をしりぞける。「がらんとした気持ち」とは、異質な世界から遠ざかってしまった大人の、そして近代社会の時代意識そのものでもある。

「今年の終りの陽の光」のような〈子供〉の世界の輝きを際立たせるために、賢治は黙説法を用いた。「風の又三郎」の結末では、嘉助と一郎が互いの胸のうちをさぐりあう。だがその結果は語られない。語り手がその胸のうちに代弁することもない。それが「風の又三郎」の方法であった。〈風の歌〉をうたう高田三郎の場面も語られない。エピソッドが並べられた日と日の間隔も不規則に空けられる。それだけではない。東北地方の現実も、〈修羅〉の世界も語られない。

「風の又三郎」の結末には貧しい食事をとる一郎の家の場面はあるが、欠食児童や学校に來られない子供のことは語られない。冷害や凶作に苦しむ東北地方の現実には語られない。その意味で、「風の又三郎」の空間は、当時の東北地方の人々に希求された夢の世界である。森から里へ、そして町へと移っていく「グスコブドリの伝記」のブドリは、近代化の過程そのものであった。森を奪われたブドリが、森に帰るのは火山の爆破を自らの死を代償に果たしたときであった。ブドリはそうして森へ、そして母のもとへ帰っていった。とすると、「風の又三郎」は森の幸せを描いた物語といえよう。しかも高田三郎は、母のいる北海道へ帰っていく。彼もまた本来の場所へ帰っていくのである。

「風の又三郎」には、「よだかの星」に顕著にみられる〈修羅〉の世界も登場しない。賢治は、子供や山男を描き、自然の中の生き物が〈修羅〉の存在でありながら、それに気づかない孤独と幸福を「山男の四月」で描いたが、「風の又三郎」ではそうした〈修羅〉の世界の周辺にある問題も示さずに、無垢なる〈子供〉の世界の輝きを描いた。

賢治は「風の又三郎」の改稿にあたって遠野にある小学校を実際に訪れている。が、そのとき残した詩「盆地に白く霧よとみ」の方に、悲しい現実の姿はあろう。「窓五つなる学校に、さびしく学童らを」待つ姿は、「風の又三郎」

の学校の明るさをもたない。賢治の詩「旱害地帯」には、さらに、旱害によって稼げぬ農作に眉を暗くする子供達の様子が表されている。「風の又三郎」の改稿がなされた昭和六年前後は、東北地方が冷害に悩まされ、凶作に苦しめられた時期である。それ以前から世界恐慌は東北地方に農村不況というかたちで現れていた。失業者があふれ、雇用の機会をつくりだすために、岩手県は種々の政策を実施した¹⁰。あるいは「モリブデン」の採掘¹¹もそうした雇用対策の一環として招致されたものかも知れない。

北海道が東北地方同様凶作に悩まされ、日本各地から支援が送られるようになったのは、小川未明「青空の下原つば」(『青空の下原つば』昭和七年)にも描かれるところだが、採掘をはじめてはみたものの、十日余りで呼び戻されてしまう異常さの背景には、恐慌による不況の影響が高田三郎の父の会社にもあったと考えられる。「風の又三郎」に表された村童達の輝きは、やがて凶作が繰り返される東北地方から消えていく。高田三郎の転校後は秋になる。少年期が終わると、違う現実が彼らを待っている。それは高田三郎の登場によって感じた外の世界の怖さとも、高田三郎が感じた内の世界の怖さとも異なる怖さである。飢饉の現実のなかでは、「子供」の信じた世界は無力である。学校は存続しても、異質世界を生きる「子供」はいなくなる。ブドリはそうして森を奪われ、父母を奪われた。

賢治は、「風の又三郎」では森の開拓へと語りを展開しなかった。テグス工場はここにはできなかったわけである。開発されなかった世界は、開発が繰り返され、そこにあったものを破壊していった歴史と対比される。「近代」の強かな力を軽視すべきでないとするれば、「モリブデン」の採掘が中止されたことは村にとって幸いである。だが、「風の又三郎」のコンテキストに注目するならば、採掘が中止された村は、放置され、疲弊してゆく村の様相を帯びてくる。恐ろしいものは、本作では、「近代」ではなく、「凶作」であり「農村不況」であった。村童達の夏が充たされ、高田三郎も母のもとへ帰っていったとはいえず、「風の又三郎」の結末には淋しい秋風がふいている。

ブドリは十歳まで父母と幸福にくらした。「家」が幸福のあかしであった。高田三郎が恐れた自然の声を、村童達は自分達の「村の文化」のなかに自然に溶かしこんでいた。村童達や高田三郎は「子供」であることで、異質世界を生きた。その「家」や「村の文化」「子供」の世界さえも枯らしてしまう風がふく。その風を強く感じたからこそ、賢治は「風の又三郎」で「子供」の世界の輝きを描かなければならなかったのである。「今年終りの陽の光」の中に吹く風が、テキストの外に吹く風に拮抗し、それを吹き飛ばすほどに。

付記 テキストは『新校本宮沢賢治全集』を使用した。ただし題名は全集の表記「風(の)又三郎」を用いず、「風の又三郎」を用いた。

注

- 1 島村 輝「風の又三郎」(『解釈と鑑賞』二〇〇一年八月)
- 2 岡本文子「風の又三郎」における親和と排除の構図について(『和洋國文研究』二〇〇二年三月)
- 3 佐藤泰正「風の又三郎」へのおびえ(『国文学』一九八二年二月)
- 4 萩原昌好「風の又三郎」―「風の又三郎」は「又三郎」なのか(『解釈と鑑賞』二〇〇〇年二月)
- 5 秋枝美保「風野又三郎」としての「風の又三郎」(『国文学』一九九六年六月)
- 6 中村三春「ハイパーテキスト『稿本風の又三郎』」(山形大学人文学部研究年報「二〇〇五年二月」)
- 7 草稿第六一葉の当該箇所は、風の歌を中心に改稿がなされている。「あまいくわりん」は「青いくるみ」に変えられ、「すっぱいくわりん」は「すっぱいりんご」を経て「すっぱいくわりん」に変えられる。
- 8 佐藤通雅「童話「風の又三郎」―現実と超現実のはざま―」(『国文学』一九七五年四月)
- 9 昭和六年九月初旬、賢治は上郷村(現・遠野市)の沢里武治を訪ねている。同年八月一八日付同氏宛賢治の書簡に『風の又三郎』のために「八月の末から九月上旬にかけての学校やこどもの空気」にふれた旨が記されている。
- 10 『岩手県史』によると、昭和四年ごろから七年にかけて、経済界の不況にとともに、岩手県内の産業経済界も大きな影響をうけた。「金融は硬塞して、銀行業も不振となり、銀行閉鎖や合同が続出しており、農村・山村・漁村・その他この不況に喘ぎ、農漁村を救えという論議が社会の声とな」った(第十卷 三三七頁)。昭和六年暮れに開かれた岩手県議会で、時局匡救事業費の予算が計上され、事業を起こし、仕事をあたえ、現金収入の道がひられるようはかられた。「昭和四・五・六年は最もひどい農業恐慌期であり、同六・七・九年は凶作・又八年は三陸大津波が重なっている。」(『岩手県史』第九卷 五二二頁)
- 11 栗原敦は「風の又三郎」雑誌(『宮沢賢治』第一五号 一九八五年四月)のなかで、モリブデン採掘準備の背景を賢治の地質調査の発見から説明したうえで、「岩手日報」(大正七年七月六日)の記事「硫黄山休山式」を紹介し、「都合により一事中止」された硫黄山休山式の背景に「景気の浮き沈み」があったことを述べている。
- 12 「東京朝日新聞」昭和六年二月九日の記事には北海道・青森の大凶作に対し、救済運動が起こっていることが記されている。

Light of sun of the end this year – Kenji Miyazawa “Kaze no Matasaburo” –

Yuji ONO*

ABSTRACT

Research has been advanced in recent years towards “Kaze no Matasaburo” calling it the tale of rebounding to the element of the modernization which Saburo Takada’s parent and child have. However, I read this work by making the culture of a village, and a child into a keyword. As a result, I showed clearly that the text “Kaze no Matasaburo” is a tale which returns to the world of the child with a more primitive child through contact with the heterogeneous world. If the language in a text is borrowed, it can be called the tale which gives a child brightness of “light of sun of the end this year.”

The heterogeneous world and the strange world are that it is also rich in the culture of a village. Saburo Takada lived the child’s world by touching it. And Ichiro and Kasuke lived the child’s world similarly. Then, when the world of the child who shines was considered from the time situation, it had become an antithesis to the real world of a poor harvest or farm village depression.